

環境文明社会づくり あれこれ(10)

加藤 三郎

源流(10)

前回記したように、私はストックホルムからパリに回り、その翌年にはOECD日本政府代表部で担当することになっている環境委員会関係の仕事を現地で見聞した後、東京に戻ってきた。そしてすぐに、ストックホルム会議とはどんな会議だったのか、その記録を整理し、文書化する作業を国際課の全員で取り組んだ。今、私の手元に残っているのは環境庁国際課編の「国連人間環境会議の記録」(非売品)である。最近、この本を何度も読み返す機会があったが、環境行政の視点からは過不足のない記録になっているのがうれしい。

さて、これら作業が一段落すると、政府代表部の書記官、つまり「外交官」になるため、外務省研修所で一通りの研修を受け、その間に環境庁の仕事もこなすというわけで、相変わらず忙しい生活が続いていた。しかし私にとっては、もう一つ大きな問題があった。それは、その頃、三人目の子供を出産した妻の心身が不調に陥ったことであった。3年間パリに赴任する身であるので、家族帯同が原則

である。そこで医療機関での検診や治療を受け、八方手を尽くしたが、赴任間近になっても回復が見込めなかった。そこで、回復したら後から追いかけるという前提で、病妻と幼い三人の子を妻方の実家に預けて、73年9月27日夜、家族や役所の先輩・同僚に見送られて羽田を飛び立ち、翌日午前、パリに到着した。この日が私にとって極めて充実した3年となるパリ生活の出発点となった。

この時から約半世紀の月日を経たが、パリでの3年間がなかったら、私の人生は恐らくもっと干からびた、つまらないものになっていただろうと思えてならない。何故かと問われれば、適切な答えを探すのに窮する。かつてヨーロッパには「都市の空気は人を自由にする」という言い方があったそうだが、確かに私は、東京・霞が関での超多忙な日常から解放され、同じ役人生活とはいえ、時間的にもゆとりがあり、一人で自由に考えることが可能な環境を、パリという飛び切り個性豊かな都市で与えられたからかもしれない。いわば深海に棲み慣れた魚が、浅海に浮上して、

心の余裕を得たようなものかもしれない。

そもそも政府代表部での当時の書記官生活とはどんなものだったか、簡単に説明しておこう。普通の大使館との大きな相違点は、外交の対象であるOECDの役割機能に由来する。つまり、OECDは西側先進国間(赴任当時は24カ国)で広く国際に係る経済・社会政策についての情報交換や、必要に応じて調整をする場であることから、館員は外務省だけでなく、関係省庁(当時は大蔵、通産、経企、運輸、農林、文部、科学技術、公正取引と環境の9省庁)から1~3人の官僚が「外交官」の身分で出向し、各専門委員会を分担して対応していた。ということは、OECD環境委員会の仕事は、形式的には大使、公使、総務参事官らの承認の下ではあるが、東京からの指令に応じて、実質的に私一人で対応すればよく、自由度は高かった。これが私の「自由」の源泉であり、ここで何を学び、何を身に付けたかは、次回以降に語る。

